

【家族構成】

父（会社員・コラムの筆者）、母（会社員）、高校生（男の子）、小学生（男の子）

家庭での教育が子どもの成長に大切であろうことはそれなりに意識していましたが、具体的な準備ができずに親になりました。しかし、うまくできているもので、子どもが生まれてからしばらくは難しいことを考えるよりも、とにかく子どもがしっかり食べてしっかり寝てくれるようにするだけで手一杯ですし、それで良いのだと思いました。言葉を話し始め、いたずらをするようになってからが、家庭での教育の本番です。世間にはいろいろな情報があり、幼少のころから工夫を凝らした教育をした方が良いのではないかと一瞬考えました。しかし、妻と私が共働きであることを前提にすると、多くの時間を工面するのは現実的ではないこともあって、良く言えば「子どもの成長に合わせた自然体の子育て」をしてきたなどという感想もっています。

とはいえ、二人の子どもそれぞれの性格や関心事は異なり、親のふるまいも異なるものになります。一回通った道だから楽できるというようなものではないですね。しかし、どの子にも共通する子育てのポイントがあると最近感じます。それは、自己肯定感を高めるようにふるまうということです。親の立場では、子どもを思う気持ちから、どうしても子どもの短所や不得手なことが目につき、それを指摘しがちかもしれません。しかし、それよりも重要なのは、それぞれ違った個性をもつ子どもの長所や得意なことを活かせる場面を用意し、そこで小さな成功体験を積んでもらうことだと子育ての途中で気づきました。おかげで、小学生の時には身体は大きいけど運動が苦手な性格的にも内気だった子が、高校生になった今、コンタクトスポーツに没頭しています。

さて、政府資料等では「日本では共働き世帯が増加しているが、夫の家事・育児時間は少ない」とあります。結婚する前から、自分の家庭ではこのアンバランスを解消したいと考えていましたが、なんとなく頑張るみたいな意識だけでは解消しないだろうとも考えていました。そこで方針を一つ決めました。「妻の苦手なこと・気が進まないことは自分がやる」です。もしかすると「自分の得意なことをやる」というやり方もあるかもしれません。しかし、妻の苦手なことや気が進まないことにフォーカスすることで、妻の時間的な負荷だけでなく心理的な負荷をさげられるのではないかと考えました。具体的なことをあげると、役所での手続きや学校とのやり取りなどの事務仕事のもの、また、地域活動・PTA活動への参加の多くは私が担当してきました。また、いつもは妻がやってくれるものであっても、妻

の気が進まないときはできる限り自分がやろうと意識してきました。「補完する関係」ということでしょうか。結果としてはそれなりにうまく回っています。「できる人が・できるときに・できることを」とはよくいわれます。そこに「パートナーが苦手なこと・気が進まないこと」を付け加えるとさらに良いのではないかというのが、これまでの経験から得た気づきです。

結果や気づきを書くときれいごとになりがちですが、正直に言うと悩んだ場面や夫婦間の意見や反りが合わない場面が多々ありました。今後も試行錯誤しながらの子育てが続きます。仲間とのざっくばらんな意見交換をしながら、子育てという貴重な時間を過ごしていきたいです。

令和3年3月